

真の「文化交流」とは何か ——井上靖と冰心を通して

虞 萍

はじめに

中国現代文学館には中国女性作家 冰心^{ひょうしん}¹（1900-1999、日本では「謝 冰心^{しゃひょうしん}」と呼ばれる）の所蔵した寄贈書がある。そのなかで、日本の小説家・詩人として著名な井上靖^{いのうえやすし}²（1907-1991）から贈られた本が最も多くて、7冊に上る³。それぞれは、写真1-写真7で示したように（出版順、筆者撮影）、『崑崙の玉』（文芸春秋、1970年）、『歴史小説の周囲』（講談社、1973年）、『桃李記：小説集』（新潮社、1974年）、『桃李記』（新潮社、1974年）、『わが母の記』（講談社、1975年）、『わが一期一会』（毎日新聞社、1976年）、『ゴッホの星月夜』（中央公論社、1981年）である。それぞれの内表紙に、「謝冰心先生 惠存 井上靖」、「謝冰心先生 惠存 井上靖」、「謝冰心女士 惠存 井上靖」、「謝冰心女士 井上靖、1977年8月」、「謝冰心女士 1975年5月17日於北京 井上靖」、「謝冰心女士 井上靖」、「謝冰心女士 井上靖、1984年11月17日」、と書いてある。これらの贈呈の言葉を比較すると、井上の冰心に対する呼称の変化が窺える。最初の二冊、すなわち『崑崙の玉』と『歴史小説の周囲』に、井上は「謝冰心先生 惠存」と書いている。写真1と写真2でわかるように、「冰」という字の書き方が間違っている。だが、相手のことを先生と称するには、やはり敬意といささかの遠慮があると思われる。しかし、その後、井上靖が冰心に贈った本に、井上は「謝冰心女士 惠存」、「謝冰心女士」と書くようになった。冰心に対するこのような呼称に現れた井上の変化は、二人の間の距離が徐々に縮まったと推測するこ

写真1 井上靖『崑崙の玉』文芸春秋、1970年（謝冰心先生惠存 井上靖）

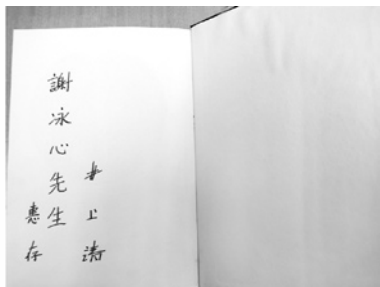


写真2 井上靖『歴史小説の周囲』講談社、1973年
（謝冰心先生惠存 井上靖）

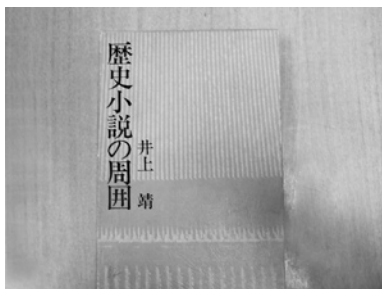


写真3 井上靖『桃李記：小説集』新潮社、1974年
（謝冰心女士惠存 井上靖）

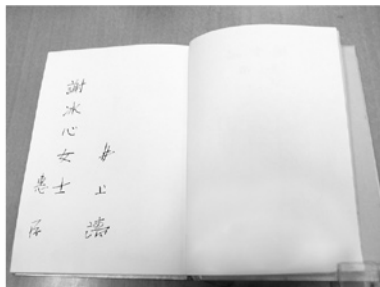


写真4 井上靖『桃李記』新潮社、1974年
 (謝冰心女士 井上靖、1977年8月)

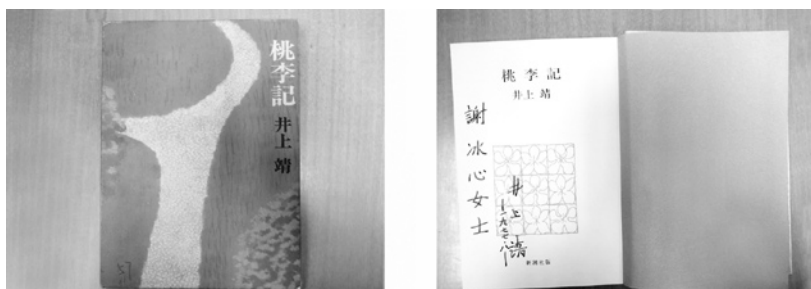


写真5 井上靖『わが母の記』講談社、1975年
 (謝冰心女士 1975年5月17日於北京 井上靖)

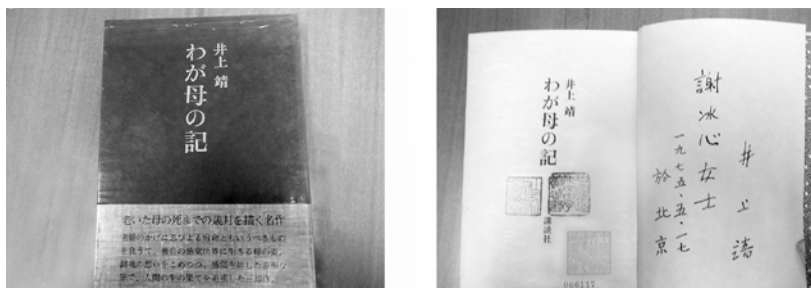
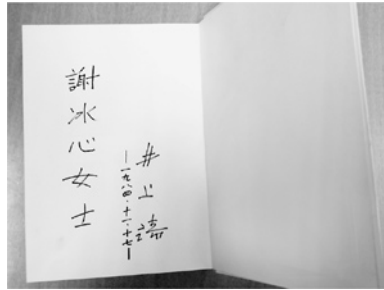


写真6 井上靖『わが一期一会』毎日新聞社、1976年
 (謝冰心女士 井上靖)



写真7 井上靖『ゴッホの星月夜』中央公論社、1981年
(謝冰心女士 井上靖、1984年11月17日)



とができよう。

井上靖と冰心との距離はどのようにして縮まったのか。言い換えれば、彼らはお互いにどのような努力と交流を経て、赤の他人から国籍を超えた親友関係に結び付いたのか。二人はどのような接点があったのか。さらには、彼らにとって、真の「文化交流」とは何か。小論ではこれらのことを解釈し、解明することを目的とする。

これまでに、井上靖に関する研究は多くある。井上靖がまだ健在であった頃、日本の一部の雑誌はすでに「井上靖特集」を組み、歴史とロマン⁴、井上靖の女性観・自然観・美術評論・作品世界の面⁵から井上靖とその作品について論じていた。近年では、老いと死をみつめる、西域シルクロード、歴史と小説、美と向き合う、社会と小説というテーマから組まれた「井上靖特集」⁶があり、また、井上靖の歴史観⁷、井上靖と地域研究⁸などの研究も盛んになった。しかし、管見の限り、井上靖と中国知識人あるいは文学者との交流に関する研究は少ない⁹。

他方、近年、冰心に関する研究が増えつつある¹⁰。日本では、アメリカ留学時期の研究¹¹、冰心と中国知識人の交流¹²、文革後期の冰心が民族及び領土問題関連の国策に関与してきたこと¹³、冰心の作家魂¹⁴、冰心と西洋知識人の交流¹⁵などの研究が行われてきた。しかし、冰心と日本知識人は

どのような交流を行い、それがその後の日中交流史にどのような影響を与え、どのような歴史的な役割を果たしたか、という視点からの研究は十分に言われてきたとは言えない¹⁶。

写真8で示したように、中国現代文学館所蔵の冰心寄贈書の中で、「日本中国文化交流協会」から贈られた福田宏年^{ふくだひろとし}の『井上靖の世界』（講談社、1972年）がある。この本には一枚の紙が貼られている。そこには、「この著書〈福田宏年『井上靖の世界』〉は、表現および用字用語の点で不適当と思われるところが数か所ありますが、作家井上靖を理解するための資料として適当なものと思われます。一日本中国文化交流協会」と説明している。一体井上靖と「日本中国文化交流協会」とはどのような関わりがあったのか。

写真8 福田宏年『井上靖の世界』講談社、1972年



小論では、井上靖と「日本中国文化交流協会」の関わりを中心に、彼の中国訪問を追いながら、彼の実体験に基づいて、彼の日中交流に対する考え方、期待などを探りたい。また、井上靖と冰心との具体的な交流状況を整理したい。具体的には、井上靖が訪中したときの冰心との交流、冰心が来日したときの井上靖との交流、という二本の柱から考える。最後に、井上靖と冰心の日中友好事業に抱く信念を追求し、彼らの行動が日中交流史にもたらした意義をまとめたい。

一 井上靖の中国訪問——「日本中国文化交流協会」との関わりを中心に

井上靖は、中国と深い縁があった。それは、彼が属していた「日本中国文化交流協会」と深く関係することでもあった、と思われる。本章では井上靖の「日本中国文化交流協会」との関わりを糸口として、彼の訪中記録に基づいて、彼の訪問日程、訪問場所、中国側の団体および中国知識人との交流状況などを整理したい。

1. 「日本中国文化交流協会」の設立経緯

新中国の成立後、周恩来元総理をはじめとする中国首脳は、日本の広範な文化界を結集した組織の必要性を痛感し、その設立を願っていた。1955年11月、片山哲元首相、演出家の千田是也らが北京を訪問した際に、日本中国文化交流協会設立についての「申し合わせ」に調印し、中国側は趙毅敏、陽翰笙、老舍、歐陽予倩、馬思聰、劉開渠、蔡楚生、戴愛蓮、陳忠経が署名した。千田は帰国後、フランス文学者で評論家の中島健蔵ら文化人士に働きかけ、白土吾夫を中心に「日本中国文化交流協会」の設立準備を進めた¹⁷。

1956年3月23日、「日本中国文化交流協会」の創立総会が東京丸の内の日本工業倶楽部で開かれ、片山哲を会長、中島健蔵を理事長に選出した。創立時の会員は約80名であった。事務局は新橋にある役員の仕事所を借り、半年後には篤志家の好意により、丸の内三菱仲12号館の一室に移った。当時の役員には、青野季吉、東龍太郎、伊藤武雄、牛原虚彦、梅原龍三郎、海野晋吉、川崎秀二、川端康成、茅誠司、北村徳太郎、木村伊兵衛、久保田万太郎、佐藤春夫、鈴木一雄、千田是也、武田泰淳、竹中勝男、谷崎吉仁、南原繁、花柳寿輔、福田豊四郎、豊道慶中、星島二郎、堀内敬三、松村謙三、山田耕筰、山本健吉、渡辺義雄が就任していた。また、設立当初、中島健蔵、千田是也、井上靖、団伊玖磨らが中心となり、活動が展開されていた¹⁸。

井上靖の回想によると、日中両国の文化交流と友好親善は協会の二つ大きな目標である。設立当初は、中島健蔵は理事長、白土吾夫は事務長を務めていた¹⁹。

2. 井上靖の中国との関わり——訪中記録に基づいて

(1) 日中国交正常化（1972年）以前の活動状況

1957年10月、井上靖は訪中日本作家代表団の一員として、中国の北京、上海と広州に行った。当時、山本健吉は団長で、ただゆうけい とがえりはじめ なか多田裕計、のしげはる ほったよしえ ほんだしゅうご十返 肇、のりゅうしやうき中野重治、堀田善衛、本多秋五が同行した。一行は旧ソ連の十月革命四十周年の祝賀の式典に参加し、北京の体育館で、りゅうしやうき劉少奇の発言を聞き、周恩来の姿を見た²⁰。11月5日、井上靖は中国作家ろうてきい楼適夷と歓談した²¹。一行は敦煌へ行く予定であったが、悪天候のため、断念した²²。これは戦後井上靖の初めての訪中であった²³。

1959年2月、文学座、俳優座、民芸三劇団合同による「閩漢卿」（作・田てん漢、演出・千田是也）が東京で公演された。日中国交正常化の必要性を国民に呼びかけ、早期実現を日本政府に要望するために設けられた日中文化関係懇談会の設立総会が東京一ツ橋学会館で開かれた。井上靖が発起人の一人であった²⁴。

中国人民対外文化協会²⁵、中国作家協会²⁶の招請で、1961年6月28日-7月15日、日本作家代表団かめい かついちろう（亀井勝一郎団長、井上靖、ひらのけん ありよしざわ こ平野謙、有吉佐和子、白土吾夫）が訪中した。これは井上靖の二回目の訪中であった。一行は広州、北京、合肥、上海、南昌を回り²⁷、北京に行ったとき、人民大会堂に招かれて、井上は周恩来と初めて会話を交わすことができた。井上靖の記録によると、ちんぎ すほん成吉思汗のことが話題にのったとき、周恩来は成吉思汗というべきところを、井上の方を向いて笑いながら「蒼き狼」と言った²⁸。これは成吉思汗を主人公とした井上の小説の題名であるため、井上は周恩来のこの引用にさぞ驚き、うれしかったであろう。また、中国側の招宴において、ぼうじゆん茅盾、かえん老舍、りゅうはくう夏衍、劉白羽といった文学者と卓を囲んだ²⁹。

1963年9-10月、北京と揚州における二つの鑑真和上円寂1200年記念集会和揚州の鑑真記念館の定礎式に出席するため、井上靖は日本文化界代表団の一員として、元早稲田大学教授安藤更生あんどうこうせい団長、美術評論家宮川寅雄みやがわとら お書長、宗教史の佐木秋夫さきあきお、中国美術の長島健ながしまけん、薬学の長沢元夫ながさわもと おと訪中し³⁰、郭沫若かくまつじやく、趙樸初ちようぼくしよと親しく話す機会を持った³¹。これは井上の三回目の訪中であつた。一行は北京、西安、南京、揚州、上海、杭州、広州を訪問した。10月1日、井上靖は天安門楼上で、周恩来に会い、その時、「周総理は一人一人、丁寧に握手されたことが、何とも言えない暖かさで心に捺されている³²」、と井上が回想している。

以上述べたように、日中国交正常化がまだ実現されていない中、1956年3月23日に発足した「日本中国文化交流協会」は中国との交流をすでに行い、井上靖の中国訪問はその歴史背景の中で実現された。

(2) 日中国交正常化（1972年）以降の活動状況

1972年、日中国交正常化が実現された。とは言っても、その時は文化大革命のまっただなかである。井上靖の第四回目の中国訪問は、1963年の11年後、すなわち1974年によく実現した³³。その年の9月29日、中島健蔵は団長を務め、井上靖は日本中国文化交流協会代表団の一員として、日中直行定期便一番機によって、北京に到着した³⁴。国慶節の祝宴の席に、周恩来は少し遅れて宴席に就き、井上靖は遠くから彼を見た。井上が周恩来に会ったのはこれが最後であつた³⁵。その後、代表団一行は10月上旬まで、南京、揚州、上海を回つた³⁶。また、鑑真記念堂の落成を見るため、揚州にも行った³⁷。11年ぶりの訪中でもあり、また文化大革命の特殊な時期でもあり³⁸、中国ではかつて指導的立場にあつた人たちは完全に姿を消し、彼らの目の前に出て来た作家や詩人は概して若い人であつた³⁹。

1975年5月8-27日、井上靖は日本作家代表団の団長として、戸川幸夫とがわゆきお、水みな上なみ勉みつとむ、庄しょう野の潤じゆん三ぞう、司しばり馬りょう遼たろう太郎おだ、小おだ田ぎり切すすむ進すむ、福田宏年および日本中国文化交流協会の白土吾夫さとうじゆんこ、佐藤純子と一緒北京、洛陽、西安、延安、無

錫、上海を訪問した⁴⁰。5月25日、文化大革命を扇動し、発動させた「四人組」の一人であった元政治局委員姚文元ようぶんげんが一行と会見した⁴¹。当時、中国は文化大革命がまだ終わってなく、まさに「非常時期」に陥っていた頃であった。井上靖らの中国訪問は作家代表団としての訪問ではあったが、しかし文学者同士の交流というものは殆んどなかった。なかったというより有り得なかったのであった。井上らは相手の教条主義的な文学理念というものを黙って聴き、自身たちの文学観というものを、相手を刺戟しない形で述べた。相手はまた井上らが喋ることを黙って聴いていただけ⁴²、という状況であった。

1976年11月29日-12月15日、井上靖は日本作家代表団団長として、六回目の訪中をした。彼は巖谷大四いわや だいし、伊藤桂一いとうけいいち、清岡卓行きよおかたかゆき、辻邦生つじくに おおおかまこと、大岡信はたこうへい、秦恒平と北京、大同、杭州、紹興、蘇州、上海を回った。井上以外はみな初めての新しい中国訪問で、他に日本中国文化交流協会の白土吾夫と佐藤純子が加わった。11月30日、中国人民対外友好協会が宴席を主催した。12月7日、井上靖は鄧穎超とうえいちょうに初対面し、林林りんりん、冰心びんしん、嚴文井げんぶんせい、陳其通ちんきつう、李季りき、茹志鵬じょしけんに会い⁴³、廖承志りょうしょうし、王炳南おうへいなん、王冶秋おうやしゅう、趙樸初ぜんへいかにも会った⁴⁴。帰国する上海空港で、井上は巴金にも再会することができた。その時、文化大革命が終わり、中国は暗雲の取り払われた明るい新しい時代を迎えていた、誰に会っても明るかった⁴⁵、と井上は感銘し、心から喜んでいた。

その後、井上靖は文化大革命を含め訪中しなかった空白の11年間を取り戻そうとするかのように、中国を頻繁に訪れた。1977年、1979年、1980年、彼は天山南麓、崑崙山脈にあるいくつかの砂漠の集落を経巡ることができた。彼は「それは夢のような話」とうれしげに述べ、それは作家としての自分の持った幸運であり、その幸運を支えてくれた中国の友人に感謝したい⁴⁶、と感謝の意を述べた。

前述したように、1957年10月、井上靖は敦煌に行きたかったが、悪天候のため、実現することができなかった。彼のその夢は約20年後の1978年に

ようやく実現した。彼はその年の5月2日から6月にかけて、約40日間敦煌の旅をした⁴⁷。また、その年に、井上靖は訪中日本作家代表団の団長として、水上勉、阪田寛夫、奥野健男、城山三郎、尾崎秀樹、三好徹、山田智彦^{ひこ}と、南京、揚州、蘇州、上海にも旅をした⁴⁸。一行は中国人民対外友好協会の招宴で、茅盾、周揚^{しゅうよう}、夏衍、巴金、劉白羽などの多勢の人に会った⁴⁹。また、『李自成』の著者姚雪垠^{ようせつぎん}、老舍未亡人胡黎青^{こけいせい}、令嬢の舒齊^{じょせい}にも会った。井上は老舍の死を『壺』という作品に取り上げたため、胡黎青から鄭重に礼を述べられた。さらに、井上は、13年前に『天平の甍』を訳した楼適夷に、短篇集を訳した唐月梅に、上海では杜宣に会うことができた⁵⁰。

1979年7月、井上靖は『天平の甍』の中国におけるロケーションの一部に立ち会うため、訪中した。8月、井上は新疆地区を訪問し、10月にも訪中した⁵¹。11月、井上は映画『天平の甍』の中国撮影が桂林におけるロケーションで終わると聞いて、中国側の多大な協力に対する礼儀としても、また日本の撮影スタッフ一同の長期にわたる努力に対する感謝の気持ちの表明としても、『天平の甍』の原作作者として桂林まで出向いて行くべきだと考え、中国に行った⁵²。

NHK放送局は1980年1月、NHK特集「シルクロード」の本放送にさきがけて、「シルクロードを翔ぶ」（1月7日）を放送した。また、3月には「秘境 シルクロードへの誘い」（3月31日）を放送した。司馬遼太郎、井上靖、陳舜臣^{ちんしゅんしん}はスタジオに招かれて、取材フィルムのハイライトを見ながら、思想・芸術・宗教の面からシルクロードの魅力を紹介した。4月から翌年3月にかけて、NHK特集「シルクロード」の中国シリーズが12回にわたって放送された。井上靖は1980年6月2日に放送された「第3集 敦煌」に出演した⁵³。それは井上が5月に中国の新疆地区に入り、タクラマカン砂漠の南辺のいくつかのオアシスを訪ねて⁵⁴帰って来たばかりの時であった。

井上靖は自ら中国に行き、中国の知識人と交流するのみならず、日本中

国文化交流協会の招きで来日した中国人をも接待した。例えば、1975年5月5日、日本中国文化交流協会の招きで、中国報道界代表团が来日した。朱穆之は当時新華社社長として団長を務め、井上靖は一行を接待した⁵⁵。1978年8月12日、日中平和友好条約が締結された。締結されるまでに6年がかかった⁵⁶。1979年、井上靖は東京に中国から多勢の友人を迎えた。春には胡喬木、初夏には周揚、秋には賀敬之、晩秋には常書鴻を接待した。周揚、常書鴻とは、それぞれ何日か関西を旅行した⁵⁷。井上は中国作家代表团を気持ちよく迎え、団員たちと楽しい充実した二十日間を過ごした⁵⁸、と言う。

井上靖の日中交流事業における活躍ぶりが日本中国文化交流協会に認められて、1980年6月、彼は会長に就任した⁵⁹。日中国交正常化以後、時代は大きく変わり、日中兩國の関係も大きく変わった。1981年、日本中国文化交流協会創立二十五周年を記念して、中国から二つの代表团を迎えた。一つは王炳南を団長とする中国人民対外友好協会代表团で、もう一つは陽翰笙を団長とする中国文学芸術界連合会代表团であった⁶⁰。同年3月23日、井上靖は、日本中国文化交流協会創立二十五周年記念レセプションに参加し、広く各界と友好を深めた⁶¹。また同じ月に、「中山王国文物展」、「南京博物院展」も開催した。4月には、訪中新劇公演が行われた⁶²。「南京博物院展」は初めての大きな日本への展示であり、同院の名品が外国で公開されるのは、初めてであった⁶³。「南京博物院展」の特長は、これまで日本で度々開催された中国の文物展が、主として、黄河中流の流域に発達した、いわゆる中原の文明を紹介するものであったのに対し、主に、揚子江下流の流域に栄えた江南文化が紹介される点にあった⁶⁴。

日本中国文化交流協会の公務および自身の作品が映画化され、井上靖は中国での撮影を見るために度々中国を訪問した。また井上靖は飽きることなく、プライベートでも中国を訪問した。1982年12月29日-1983年1月4日、彼は妻、息子、孫、白土吾夫夫妻、佐藤純子と一緒に北京へ、翌年1月4-6日には上海を回った。プライベート訪問とは言え、井上靖は1982年

12月30日に、夏衍が主催する中国文学芸術界連合会（文連）の招宴に参加した。翌日、王炳南の自宅に招かれた。1983年1月3日昼、廖承志に招かれて、夜は中国作家協会と中国ペンセンター共同主催の招宴に参加した。また、中国人民対外友好協会のメンバーにも会い、北京と上海の病院に周揚と巴金をも見舞に行った⁶⁵。井上は中国にいる親友たちに次々に会いに行ったり、招かれたりしていた。これらのスケジュールから見ると、井上は家族、友人と中国旅行をしたと言うより、むしろ中国にいる親友たちにわざわざ日本から会いに行ったと言った方が適切であろう。

1983年12月、年末の13日間、中国人民対外友好協会の招きで、井上靖は日本中国文化交流協会代表団の一員として、北京、開封、成都、上海を訪ねた。北京では、鄧穎超、胡喬木に会い、周揚、王炳南の自宅を訪問し、当時専務理事であった白土吾夫の訪中百回記念パーティを行った⁶⁶。

1984年、井上靖にとってはまたもや慌ただしい一年であった。日本中国文化交流協会は、日本ペンクラブに協力し、4月28日、江 曉 天^{こうぎょうてん}を団長とする中国文学芸術界連合会代表団が来日し、5月9日、周揚一行が来日した⁶⁷。12日、副団長の劉白羽^{しゅうしき}、朱子奇らの代表団一行が日本に到着した⁶⁸。同じ月に、巴金は中国ペンセンター代表団団長として、14日から国際ペン東京大会に参加するために、来日した。6月、朱穆之文化部部长が外務省賓客として来日し、その日程を終えたあと、井上靖を含む日本中国文化交流協会が中国側一行を招いた⁶⁹。11月、井上靖は北京、ウルムチ、ハミ、西安を訪れた。

以上述べたように、井上靖は1957年10月から1984年にかけて約20回中国を訪問した⁷⁰。その間に中国を題材に関する小説が次々と発表され、数々の賞を得ている。例えば、西域を舞台にした『天平の薨』(中央公論社、1957年)は1958年に芸術選奨文部大臣賞を受賞し、『敦煌』(講談社、1959年)と『楼蘭』(講談社、1959年)は1960年に毎日芸術賞を受賞した。

1986年1月、シルクロードに続く日中共同取材番組であるNHK特集「大黄河」の本放送を前に、NHK特集「大黄河 悠久の旅」(1月2日)が放送

された。この番組はスタジオに作家の井上靖と陳舜臣を招き、黄河への思い、黄河と日本の関係、歴代王朝の威信をかけた黄河探索の歴史などの話を聞いた⁷¹。3月、日本中国文化交流協会創立三十周年に、井上靖は章文^{しょうぶん}晋^{しん}を団長とする中国人民对外友好協会代表団、呉^こ作^{さく}人を団長とする中国文学芸術界連合会代表団を迎えた⁷²。4月下旬、中国文化部の招きで、井上は河南省にある春秋時代のいくつかの古い遺跡を訪ねた。その年、井上は北京大学から名誉博士号が贈られた。これは井上靖の二十五目の訪中であつた⁷³。

1987年4月、中国作家協会主席団委員、同協会広東分会主席の陳^{ちん}残^{ざん}雲^{うん}を団長とする中国作家代表団（5名）が来日した。王^{おう}蒙^{もう}文化相が外務省の賓客として来日し、後半は、日本中国文化交流協会の招く日程で過ごした⁷⁴。

井上靖は日本中国文化交流協会の頻繁な日中交流活動をこなすのみならず、中国を題材とする作品の創作にも力を注いだ。『孔子』という作品は井上が食道癌の手術を受けた後、80歳になってから着手して2年後に完成した長篇であり、生涯最後の長編小説であつた。1989年、『孔子』は第42回野間文芸賞を受賞した。井上靖という作家の創作意図、彼の作品を理解し、読み解くには、中国と引き離して考えることができないと言っても過言ではない。

1990年4月、日本中国文化交流協会は中国から二つの代表団を迎えた。一つは韓^{かん}叙^{じょ}会長を団長とする中国人民对外友好協会代表団で、もう一つは張^{ちやう}徳^{とく}勤^{きん}局長を団長とする中国国家文物局代表団であつた⁷⁵。井上靖はその年の秋に、中国に訪問する予定であつたが、体調不良のため、実現することができなかつた⁷⁶。1991年1月29日、井上靖は急性肺炎のため、この世から去つた。

以上、「日本中国文化交流協会」を糸口に、井上靖が日中国交正常化以前と以後の中国訪問状況を彼の訪中記録に基づいて、彼が具体的に回つた中国の場所、日時、中国側の団体および中国知識人との交流状況などを整理した。井上の頻繁な中国訪問、中国訪問団の接待状況を見ると、彼が日中

友好事業に切望する気持ちを感じ取れよう。

一方、中国にも井上靖と同じように、日中友好事業に尽力する知識人がいた。彼女は井上靖の友人でもある中国の女性作家冰心である⁷⁷。次章では、井上靖と冰心の具体的な交流に焦点を当てたい。

二 井上靖と冰心との交流

井上靖と冰心が知り合ったのは、1957年10月井上が訪日本作家代表団の一員として、北京に訪問したとき、と推測される。井上靖は「旧知貴ぶべし」(『日中文化交流』第62号、1974年1月)で次のように回想している。「私は戦後招かれて三回、中国の土を踏んでいる。そのたびに何日か北京に滞在し、その間毎日のように(謝冰心に：虞萍注)お目にかかっているはずである。」⁷⁸ 前述したように、戦後、井上靖は中国に初めて訪問したのは1957年10月で、その後は1961年6月28日-7月15日と1963年9-10月に中国を訪問した。井上がここで触れた戦後三回の中国訪問とはこの三つの時期である、と考えられる。一方、冰心は井上靖と初めて会った年月を記憶にないと表明していた⁷⁹。

井上靖が五回目に中国に行った(1975年5月8-27日)際にも、冰心に会った。1975年5月16日、冰心と夫呉文藻^{こぶんそう}、巖文井らは中央民族学院で井上靖を団長とする日本作家代表団の井上靖、小田切進、司馬遼太郎、庄野潤三、戸川幸夫、水上勉を接待した。5月17日、冰心は彼らからサイン入りの寄贈書を贈られた。それらは、井上靖の『わが母の記』(講談社、1975年)、小田切進の『日本の名作』(中央公論社、1974年)、司馬遼太郎の『故郷忘じがたく候』(文芸春秋、1974年)、庄野潤三の『絵合せ』(講談社、1971年)、戸川幸夫著、石田武雄絵の『三里番屋』(国土社、1972年)と水上勉の『越前竹人形』(中央公論社、1975年)である。それぞれの寄贈書の内表紙に、「謝冰心女士 1975年5月17日於北京 井上靖」、「謝冰心先生 小田切進、1975年5月17日」、「謝冰心女士 司馬遼太郎、1975年5月17日於北京」、「謝冰心女士 庄野潤三、1975年5月17日於北京」、「謝冰心女士

1975年5月17日、戸川幸夫、「謝冰心女士 水上勉、1975年5月17日」⁸⁰、と書いてあった。当日、呉文藻も同行したため、庄野潤三からは『夕べの雲』（講談社、1966年）という寄贈書をサイン入り（「呉文藻先生 1975年5月17日於北京、庄野潤三」）で贈られた。5月19日、冰心、巖文井が井上靖夫婦を北京香山公園に案内した⁸¹。

井上靖と冰心は中国で実に頻繁に会っていた。前述したように、1976年11月29日-12月15日、井上靖が日本作家代表団団長として、六回目の訪中するとき、すなわち12月7日の日にも、冰心と北京で会った⁸²。また、中国現代文学館所蔵の、井上靖から冰心への寄贈書の内表紙を確認する限り、1977年8月、井上靖は冰心に『桃李記』（新潮社、1974年）を贈り、1984年11月17日には、『ゴッホの星月夜』（中央公論社、1981年）を贈った。そのため、二人はそれらの時にも会っていた⁸³、と考えられる。1981年、冰心が病気のため家で休養していた時、井上夫婦と中島健蔵未亡人がどうしても見舞いをしたいと言って、わざわざ北京に行った。冰心はこのことを一生忘れない⁸⁴、と感激した。冰心の記憶によると、「井上靖は西北から北京に戻って来るたびに、旅行で見た聞いたことを私たちに（冰心とその他の友人のこと：虞萍注）すべて話してくれる⁸⁵。」

1963年10月4日、中国では「中国日本友好協会」⁸⁶が創立され、日中交流が拡大した。冰心は協会発足時の常務理事を担った⁸⁷。これをきっかけに、冰心は日中友好事業により一層没頭した。冰心は生涯にわたって8回来日した⁸⁸。現在のところ、井上靖と冰心が日本で会ったのは少なくとも2回あり、それは1963年と1973年である、と判明している。それに2回とも、冰心は井上靖の自宅に招かれた。

1963年11月5日-12月3日、冰心は中国作家代表団副団長として東京に行った。これは冰心の6回目の来日であった。当時、巴金が団長を務め、巖文井、馬烽、許覚民まほう きょかくみんらも同行した⁸⁹。井上靖の「旧知貴ぶべし」（前掲）によると、冰心らは1963年東京を訪問した際に、井上靖の自宅を訪問し、当時高校生であった末娘「佳子」よしこに初めて会った。その日、井上は冰心に自

分が書いた数冊の本を贈り、冰心が日本語を読めないと配慮し、彼女に英訳の『獵銃』を贈った⁹⁰。

1973年4月16日-5月18日、冰心は日中友好協会訪日代表団に参加し、7回目に来日した。当時、廖承志が団長を務めていた。その際、井上靖は冰心、楚図南、李季らを自宅に招いた⁹¹。すでに結婚して、別の世帯を持っていた井上靖の末娘佳子がお茶を運んで行ったとき、冰心は顔をのぞきこむようにして、「ヨシコさんですね」と日本語で佳子呼んだ。それはその場にいた全員を驚かせた⁹²。井上靖は、謝冰心女史ばかりでなく、楚図南に対しても、李季、巖文井に対しても、そのとき同行した他の人々に対しても、誇張でなしに『旧知』といった気持をもっていた。と同時に、冰心たちの井上に対する気持も、同じであるに違いない、と確信した。さらには、「こう考えると、私は実にたくさんの『旧知』を中国にもっていることになる」⁹³、と誇りに感じた。

1964年、冰心は「訪日観感」（「訪日後の印象と感想」）で、井上靖宅のリビングに飾ってある彼が撮影した天安門広場で行われた国慶節パレードの写真を見て、大変感動した、と述べた。彼女は、「我々は日本の友人の家で、往々にして『マオタイ酒』を口にし、『中華』を吸い、中国の書、絵文物を鑑賞することができる。これらの共通の鑑賞物が、我々の心を一層近づかせた。」⁹⁴と言う。冰心は日本の友人の家で中国の物を見ると一層親しげに、うれしくなり、瞬く間に互いの心が近づいたように思えた。

冰心は井上靖の『西域小説集』⁹⁵を翻訳した中央民族学院の教師たちに「まえがき」を頼まれたとき、光栄に思うと同時に、慚愧を感じた。冰心は次のように述べている。「私は日本語もわからなければ、中国の西北に足を踏み入れたこともない。原著の風物や翻訳の苦楽について、十分味わいようもない。しかし、井上靖氏は親友である。また私は西域に行ったことがないからこそ、この歴史小説を通して、中国の西北地区における当時の美しい夢のような風景と人物を認識したい。これこそ私が喜んで『まえがき』を書き、心からこの訳本が出版されるようにと願う理由である。」⁹⁶ 前

述したように、井上靖は西北から北京に戻って来るたびに、旅行で見聞きしたことを氷心らにすべて話す習慣がある。氷心は彼の話の聞いているうちに、いつも思わず敬意を抱き、感無量になる。氷心は井上靖に感謝したい。井上によって、中国の国土の広さ、歴史の悠久さ、文化の優美さを再確認することができた、と言う。氷心にとって、井上は中国国民の最もいい親友であり、日中文化の間に美しい虹橋を架けた人である。よって、井上靖に敬意を表したい⁹⁷。

以上、井上靖と氷心との交流を、井上の中国訪問および氷心の日本訪問を通して整理した。では、井上靖はなぜ中国に頻繁に訪問し、執筆当時西域に行ったことがないにもかかわらず、歴史資料に基づいて、稗史（いわば、逸聞瑣事を記した文章）を参考にしてまで、作品を練り上げたのだろうか。なぜ井上の娘に一度しか会ったことがなく、それに日本語も話せない氷心が十年ぶりに彼女に会って、日本語で彼女を呼べたのだろうか。なぜ西域に行ったことがないにもかかわらず、快く『井上靖西域小説選』の「まえがき」を書くことを引き受けたのか。さらには、井上靖と氷心は中国と日本にそれぞれどんな気持ちを抱いているのか。彼らの日中観とはどのようなものであるのかを、次章で探りたい。

三 井上靖と氷心の日中友好事業に抱く信念

1976年、井上靖は日本中国文化交流協会が発行する月刊誌『日中文化交流』に、日本と中国の交流すべき方法を次のように述べている。「日本文学のもつすばらしいものを、中国の文学者、大衆に理解してもらわなければならないし、中国文学のすばらしいものを、われわれまた新しい時代の観点から理解していかねばならない。」⁹⁸

前述したように、井上靖は1957年から1986年にかけて、25回にわたって中国を訪問した。生涯において27回訪中した⁹⁹。井上靖はなぜそこまで中国の大地に足を踏み入れたのか。そこにはどのような意図があったのか。井上は1979年に、「周揚先生を団長とする中国作家代表団の来日を喜ぶ」と

いうエッセイで次のように述べている。「私は中国を理解するには中国を訪ねること、中国の文学者を理解するには中国の文学者と会い、膝を交えて語ることだと思っている。この思いは、私の心の中で、一つの動かすべからざる信念になっている。(中略、虞萍注) どうせ来られるなら、一人でも多くの文学者の方に来て頂きたいと思う。一度に来られないなら、何回にも分けて来て頂けばいい。とにかく、いまの私の思いは、中国の文学者のすべての方に、わが日本の土を踏んで頂き、日本の風土の中で、日本の文学者に会って頂きたいことである。新しい文学者の交歓と、新しい文化交流はここから始まってゆくのである。」¹⁰⁰ 井上の日中友好事業におけるこのような信念は終始変わらなかった。彼自身も生涯を通してこのような主旨で行動してきた。彼は日本中国文化交流協会1984年の年頭挨拶に、この主張を再度表明した。「私は中国を理解するには中国を訪ねること、中国の人々を理解するには中国の人々と会い、膝を交えて語ることだと思っている。」¹⁰¹

前述したように、1980年6月、井上靖は日本中国文化交流協会の会長に就任した。彼は「会長就任に当って」(『日中文化交流』第289号、1980年8月)という挨拶文には次のように述べている。「(日本と中国の：虞萍注) 文学、芸術、学術各分野に於て、その交流は緒に就いたばかりである。本当の交流ということは、すべて今後の問題である。」¹⁰² 当時日中平和友好条約が結んだばかりであるが、1980年5月に行われた内閣府の調査によると、「中国に親しみを感じる」と回答した日本人の割合は、78.6%を記録している¹⁰³。しかし、井上靖は決してこの数字を楽観視はしていない。なぜなら、彼にとっての真の文化交流を実現させるにはこれからが大事で、持続的な交流と発展こそが日中友好の真髄である、と考えている。彼は、「(中国と：虞萍注) 共同研究もしたいし、共同の研究発表もしたい。共同の鑑賞会も開きたいし、共同の制作発表もしたい」¹⁰⁴、と日中友好事業の実施方法と期待を述べた。

1981年3月、日本中国文化交流協会は創立二十五周年を迎えた。当時、

会長を務めていた井上靖は「年頭の言葉」で自分の信念を再度次のように強調した。「一国と一国の親善の基調をなすものが、文化交流である。」¹⁰⁵

井上靖と比べると、冰心はもう少し早い時期から日中交流の大切さに気付き、活動していた。彼女が3回目に駐日代表団の家族として来日した際、記者、三島すみ江^{みしますみえ}と会談した。記者、三島すみ江との会談録「立ちあがる友への助言」（『婦人画報』1947年2月号、1947年2月）によると、冰心は次のように率直に言った。「大切なことは、漠然と中国と日本の文化交流とかいうことより、個人的な交流とか、思想の交換です。」「ほんとうに文化的なよい国になるようにするにはどうしたらよいか」と三島の投げ掛けた問いに対して、冰心は次のように綴った。「日本人の美的観念、審美的なすぐれた点、そして非常に平和を愛好する精神、それをどこまでも持っていて、西洋の科学精神を取り入れるとよい。」冰心は決して排他主義者ではない。彼女は必要がある限り、西洋の科学精神を取り入れてもよい、と発言した。また、記者、三島すみ江ともう一つの会談録「中日の文化と再建を語る」（『主婦と生活』第42巻第2号、1947年2月）の中で、冰心は次のように表明した。「日本と中国とはお互いに隣り同志ですし、経済的にも、学術的にも、提携することがお互いに有利です。」冰心は日中交流の具体的な方法まで考え、次のように綴った。「まず、第一に学生を交換すること。それからお互いに旅行すること。そして、作家達も、日本の作家が中国の雑誌やなんかを書く、また、向うの作家にいろんなものを書いてもらう、そんなことが大切だと思います。」

1947年9月3日、冰心は日本の教育会館で、村岡花子^{むらおかはなこ}と「中国と日本の女性」について対談し、自身の日中女性の交流に対する意欲を次のように語った。「なんとしてもみなさんと手を結んで理解をふかめたい。私はそれに対して、講和条約ができるまでは手がつけられないが、さしあたり三つほどできることがある。まず日本に関する本をよむこと、日本語を勉強する、婦女関係の出版物をお互いにおくりあって文化交流をすること。」¹⁰⁶ 冰心はこれらのことを中国でみなに話した¹⁰⁷、と言う。

10月21日、冰心は「中日文化協会」に招請され、3時間にわたり熱弁を振って、200名余りの聴衆に講演をした¹⁰⁸。その講演内容は「文化交流こそ自由平和への道」という題目で、1947年11月に発行された『中日文化協会々報』第2号に掲載された。以下のように、一部の内容を抄録する。冰心は次のように言う。

私はいまここで、今日の題目である文化人は中日関係についてどういう風に努めなければならないかということに触れなければならない。私は日本へ来るまで日本国民がどれほど日本軍閥にだまされていたかということを知らなかった。それを私は日本へ著^マいてからはじめて理解させられたのである。七千万の日本人のうち六千何百万の人たちが、ごく少数の人々の導きで壊滅への道を走ったということである。

私の著作にいくつかは日本でも翻訳されて出ている。その中のひとつ「小さいお友達へ」という本の中に省略されているところがあることを、私は日本へ来て発見した。なぜこの本の中一小節が省かれたのか。私の想像では恐らくは軍閥の圧迫によってそうさせられたのではなかろうか。省略された一文は私が一九二三年、アメリカへ行く途中東京に立寄り、「遊就館」を参観したときのことである。そこには日清戦争の時の戦勝記念品や戦争に関する絵画が陣列されていた。それを見たときの感想を「小さいお友達へ」という題で書いたのであるが、そのとき私はたいへん残念な気持と恐ろしいという気持ちをもった。私はそれを率直に書き現した。その一節を読んでみよう。——私はあなたたちに、こんなことをいうのをほんとうにすまないことだと思います。私はいつも日本人が好きです。いつでも日本人にひきめを感じたり敵だというような気持を抱いたことはありません。けれども正義のために、人間が人間をいじめることは我慢ができません。私が私の弟を愛するのはあたりまえです。私たちは同じはらからです。もし私が食べ切れないほどのあまいお菓子を持っていて、弟がそれをほしがったとすれば、私はにこにこして渡す

に違いありません。でももし弟が無理やりに私から奪い取ろうとしたなら、私は正義のために勇気を出して戦うです。あふれるような熱意と愛情で彼に抵抗し、そのためにお菓子をめちゃめちゃにってしまったとしても惜しくはありません。皆さんにこんなにはげしいお話をした私をゆるして下さい。ほかの人に聞かれたのなら心配するのですが、あなたたちにお話したのですから私はとても安心しています。あなたたちはもっとも純真な純潔な判断を下す人たちだからです¹⁰⁹——これは二十年ほど前に書いたのですが、もしこの一節が二十年前に日本に紹介されていたならば、あるひは中日両国の合作の上にくらか役立ち、また両国の理解の方面に寄与するところがあったのではなかろうか。私のようなもっとも平和を愛するものの書いた作品でさえ完訳で出版されなかったのだから、まして熱烈な思想をもった作者の著作は到底紹介され得なかったに違いない。

冰心は日本の土に足を踏み入れて、日本国民の本当の姿を確認できたことにホットした。なぜならば、彼女は日本へ来るまで、日本国民がどれほど日本軍閥に騙されていたかということを知らなかったから。彼女は日本に着いて、自分の目で日本を観察し、日本で講演したとき、日本民衆が中国民衆と同じように平和を望んでいることを感じ、日本知識人との対談・懇談会・交流を重ねるにつれ、日本の本当の姿をはじめて正確に理解できた¹¹⁰。

冰心はこの講演会の最後に、将来の日中文化交流のために、両国の国民に三つの行動をすることを提案した。「第一、平和条約が結ばれたのち両国はお互いに教授学生を派遣すること、しかも多数を派遣することである。各大学から優秀な青年を選びその人の興味をもっている問題を研究させる。そして両国の大学では中日両国の政治講座、文化講座を開く。第二、両国の文化団体のお互いの訪問。第三、両国の新聞記者が新聞紙上で、極力両国の合作提携を奨励すること。これらのことが目指すものは、人間と

人間の間にはいいものを生み出すことである。この結果、もっとも優れた日本の学生が中国でもっともよき中国への理解を持つことになる。個人的にもいろいろな面でもっとも緊密な連携を保ち得るわけである。戦後間もなく、日中国交がまだ結ばれていない時期に、日中間の文化交流において、このように詳しい提案をしたのは極めて異例で、冰心の思想における先進性は認めざるを得ない。

1948年、冰心は三笠宮殿下^{みかさのみや}¹¹¹（1915- ）と対談したとき、「過去十年間における両国間の不幸は、文化人同志がお互いに手を握らなかったことに原因がある」¹¹²、と指摘した。

前述したように、井上靖は1980年日本人が中国に対して最も親しみが度が高い時期でさえも、日中交流について決して楽観視をしなかった。この考え方に関しては冰心も共通的の見解を持っていた。冰心が第7回目に来日した際、1973年5月12日、朱良^{しゅうりょう}（青年活動家）など6名の団員と「日中両国に友情の橋をかける青年の会」の要請を受けて、懇談会を行った。それに、日本の青年から最初の発言を求められた。この発言記録は「日本の青年のみなさまへ——子子孫孫の歴史とこれからの道」という題目で『アジア経済旬報』（第907号、1973年8月1日、p.1-6）に発表された。冰心は日本の青年に自身の日中観を以下のように率直に述べた。

みなさんは口癖のように「世々代々の友好」を口にします。（中略：虞萍注）思えば、私の祖父は日本にたいしては友好的でしたが、父親は日本人のかたきをとることで一杯でした。私の代になると再び日本人民との友好を願うようになりました。さらにはひとにぎりの軍国主義者と広汎な人民とを区別して戦争を考えるべきことを知らされました。現在私の息子や娘には沢山の外国のお友達がいます。孫は日本の子供さんと同じクラスで勉強しております。

ともかく、中国と日本とは二千年余りの友好の歴史が存在しておったわけです。それが今後も何万年とつづいていくのです。「子子孫孫、世世

代代」と。ですから80数年の不愉快な時代はごくわずかな期間でしかありません。忘れ去るべきです。まして、このすべての責任はほかでもなく、軍国主義者が負うべきものでして、日本の人民はいかなるときでも友好を願っていたのです。

冰心は、口で「世々代々の友好」と言うのは簡単であるが、実際に守ることは難しい、と考えた。彼女は祖父、父、自分自身と孫を例に、違う歴史状況の中での日中関係を説明し、さらにその中で生きる中国人と日本との関わりを分析した。冰心にとって、日中友好を実現させるには、不愉快な歴史を忘れ去り、戦争責任はあくまでも日本にいる極少数派の軍国主義者にあると認識を改め、日本の多くの人民は善良で、日中人民はいかなるときでも友好を願い、努力すべきであるとした。

以上のように、井上靖と冰心はそれぞれ自分自身の日中友好事業に抱く信念をエッセイ、訪中記録、対談、発言、懇談会、講演会などで述べた。彼らは日中関係を重視し、一人の知識人として、双方の国民たちにもこのような考え方を持つようにと呼びかけた。

おわりに

1991年1月29日、井上靖が亡くなった。1992年3月、財団法人井上靖記念文化財団が設立された¹¹³。「財団法人井上靖記念文化財団寄附行為」の目的はこのように説明している。「井上靖の業績と遺志を永く後世に伝えるため、井上靖を記念する賞を設定し、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績を挙げた者を顕彰するとともに、海外において日本文化の研究を行う者を援助することなどにより、文化の発展に寄与することを目的とする。」2003年、故井上靖夫人・井上^{いのうえ}ふみ（前財団法人井上靖記念文化財団理事長）から国際交流基金に1,300万円を寄付した。『井上靖全集』（新潮社発行。全28巻、別巻。1995年から2000年にかけて刊行。1セット定価約25万円）を世界各地（28カ国）の日本研究機関・図書館に寄贈した。寄贈先

は55機関に及び、中国には中国社会科学院外国文学研究所、北京日本学
研究センター、北京大学外国語学院日本語文化学部、中国国家図書館、南
開大学日本研究センターに贈った¹¹⁴。

井上靖は「日本中国文化交流協会」という組織を主な活動拠点にして、
27回にわたって訪中し、中国人の友人をたくさん作り、中国に関する多く
の有意義な小説を書き、日中友好事業に大きく貢献した。井上靖は小説を
通して、中国特有の歴史、文化、風習などを、日本人、中国人そして世界
中の人々に最確認する場を提供した。

冰心にとっては、「文化交流こそ自由平和への道」である。井上靖は1940
年代における冰心のこの提案を擁護し、解釈するかのよう、中華人民共
和国建国三十五周年の1984年に、「文化交流」の真意を次のように説明し
た。『『文化交流』が美術、音楽、演劇、文学、学術、スポーツ、出版など
の分野を包括するが、しかし、どの分野に於ても、その根底に坐るものは、
結局のところは人と人との交流、人の心と人の心との交流であろう。お互
いの間に理解と愛が生まれて、初めてその上に、両国の文化の交流という
大事業は築かれて行くのである。』¹¹⁵

今年(2012年)は日中国交正常化40周年であるが、振りかえって見ると、
日中関係は決して順風満帆とは言えない。歴史教科書問題、靖国神社問題、
尖閣諸島問題、日中関係に残されている問題は山積みである。1月30日、内
閣府サイトで公開された「内閣府世論調査報告書」(2011年10月調査)の
「外交に関する世論調査」によると、中国に親しみを感じるかと聞いたところ、
「親しみを感じる」とする者の割合が26.3% (「親しみを感じる」5.5%
+「どちらかという親しみを感じる」20.8%)、「親しみを感じない」とす
る者の割合が71.4% (「どちらかという親しみを感じない」34.8%+「親
しみを感じない」36.6%)となっている。前回の調査結果(2010年10月調
査結果)と比較してみると、「親しみを感じる」(20.0%→26.3%)とする
者の割合が上昇し、「親しみを感じない」(77.8%→71.4%)とする者の割
合が低下している¹¹⁶ものの、調査報告図10「中国に対する親近感」¹¹⁷を見

ると、1980年の一番いい時期（「親しみを感じる」78.6%）を境に、日中関係は徐々に悪くなり、近年では最も悪い時期に陥った。最近、名古屋市市長河村たかしのいわゆる南京大虐殺が存在しない発言は、日中関係にまさに「泣き面に蜂」の感がある。日本中国友好協会はこのほど常任理事会を開き、河村に南京大虐殺否定発言の撤回を求める決議を採択した¹¹⁸。

井上靖と冰心のような日本と中国の作家は、戦後、日中国交さえできていない時期からすでに日中友好の大切さを呼びかけて、そして生涯を費やして真の「文化交流」を教授してくれた。両氏が日中交流史に果たした役割は極めて大きい。21世紀に生きる我々は歴史を正確に認識し、両氏のような知識人が命懸けで教えてくれたことを咀嚼し、継承し、発展させるべきであろう。

¹ 冰心（1900-1999）。詩人・作家・翻訳家・児童文学者。1900年、福建省福州の出身である。1911年、福州女子師範学校予備科に入学。1914年に冰心は北京教会学校貝満女子中学に入学。1919年、協和女子大学理科に進学し、その後文学科に移り、学生会文書に選ばれた。大学時代、詩「繁星」、「春水」、短編小説「超人」などの作品を発表し、有名になった。1923年8月、アメリカのウェルズリー大学に留学し、文学研究に専念した。1926年7月、修士号を取得。修士論文の題目は「李易安女士詞の翻訳と編輯」（「李易安女史の詞の翻訳と編集」）であった。9月に帰国し、以降、燕京大学と清華大学で教鞭を執った。29歳の時に、社会学者呉文藻と結婚した。1949-1951年の間に、東京大学（旧東京帝国大学）で、近現代の中国文学を講じた。1951年に帰国後、創作するほか、社会活動にも参加し、中国民主促進会中央名誉主席、中国文聯副主席、中国作家協会名誉主席・顧問を務めた。『女について』、「櫻花賛」「小橘灯」などの代表作がある。作品は卓如編の『冰心全集』（全9巻、海峡文芸出版社、1999年）と冰心佚文集『我自己走過的路』（『私自身が歩んで来た道』（王炳根選編、人民文学出版社、2007年）に収録されている。

² 井上靖（1907-1991）。小説家・詩人。1907年、北海道石狩国上川郡旭川町（現・旭川市）の出身である。1908年、父が韓国に従軍したため、母の郷里静岡県伊豆

湯ヶ島（現・伊豆市湯ヶ島）へ戻る。1910年、両親と離れ、戸籍上湯ヶ島の祖母に育てられる。1914年、湯ヶ島尋常小学校に入学。1920年、祖母が死去したため、浜松の両親のもとに帰り、浜松尋常高等小学校に転入した。1921年、静岡県立浜松第一中学校（現・静岡県立浜松北高等学校）入学。1922年、静岡県立沼津中学校（現・静岡県立沼津東高等学校）に転校。1930年、石川県金沢市の第四高等学校理科卒業。井上泰のペンネームで北陸四県の詩人が拠った雑誌『日本海詩人』に投稿、詩活動に入る。九州帝国大学法文学部英文科に入学。1932年、九州帝国大学中退。京都帝国大学文学部哲学科に入学、美学専攻。1935年、京都帝国大学名誉教授足立文太郎の長女ふみと結婚。1936年、京都帝国大学卒業。『サンデー毎日』の懸賞小説で入選（千葉亀雄賞）し、それが縁で毎日新聞社大阪本社に入社。学芸部に配属される。日中戦争のため召集を受け出征するが、翌年には病気のため除隊され、毎日新聞社で、宗教欄・美術欄を担当。戦後は学芸部副部長を務めた。『闘牛』、『天平の甕』、『敦煌』、『おろしや国酔夢譚』、『孔子』などの作品がある。1995-2000年、新潮社より、『井上靖全集』（全28巻、別巻）が出版された。

³ 2011年3月31日、4月1日、筆者は中国現代文学館所蔵の冰心寄贈書を調べた。なお、調査にあたって、中国現代文学館募集編集部の手紙に大変お世話になった。ここに記して感謝を述べたい。

⁴ 『国文学 解釈と教材の研究』第20巻第3号、1975年3月。

⁵ 『国文学解釈と鑑賞』1987年12月号、1987年12月。

⁶ 『別冊太陽』第147号、2007年5月。

⁷ 例えば以下のような論文がある。矢動丸成子「井上靖『天平の甕』——歴史小説の史実と虚構」（『大宰府国文』第22号、2003年3月、p.25-32）、王春華「井上靖『楊貴妃伝』論——依拠資料の検討を中心に」（『国際文化表現研究』第3号、2007年、p.216-230）、山田哲久「『漆胡樽』論——〈歴史〉への態度」（『同志社国文学』第70号、2009年3月、p.91-104）、茂田さやか「井上靖『黯い潮』論——事実と真実の狭間」（『清泉語文』第2号、2010年3月、p.258-268）。

⁸ 例えば以下のような論文がある。谷彰「井上靖と豊橋——大正時代初期、地方都市の光と闇」（『愛知大学文学論叢』第135号、2007年2月、p.125-146）、伊東省次「井上靖とスペイン」（『イスパニア図書』第12号、2009年、p.54-60）。

⁹ 井上靖と中国知識人との交流に関する論文は見当たらない。なお、井上靖と巴金の友情に関する報道はある。（「二代目が振り返る巴金と井上靖の友情」2011年11月20日。中国網日本語版〈チャイナネット〉<http://japanese.china.org.cn/jp/>

txt/2011-11/20/content_23962324_2.htm 2012年3月21日最終確認。)また、谷川栄子は2012年3月10日に、二松学舎大学で開催された「日中文学文化研究学会」第2回大会で、「井上靖と巴金の交流について——巴金の『随想録』より」というテーマで口頭発表した。

¹⁰ 冰心に関する中国と日本における研究状況は、拙著『冰心研究——女性・死・結婚』（汲古書院、2010年）の第1、2章に詳しい。

¹¹ 牧野格子『謝冰心 アメリカ留学時期の研究』（関西大学大学院文学研究科中国文学専攻、課程博士論文、2004年）。

¹² 例えば以下のような論文がある。岡田祥子「蕭乾と冰心」『季刊中国』73（『中国文学あれこれ63』）、2003年6月1日、p.61-74。牧野格子「謝冰心と梁実秋——アメリカ留学とその後」（『国学院雑誌』第112巻第8号、2011年8月、p.1-13）。

¹³ 岩崎菜子「中央民族学院の建校目的と謝冰心夫妻・費孝通の任務——文革直後に英文で出版された少数民族概説書」（上、下）『中国研究月報』第62巻第7、8号（第725、726号）、2008年7、8月、p.13-26。p.61-74。

¹⁴ 例えば以下のような論文がある。萩野脩二「冰心の国際性」（『関西大学文学論集』第50巻第4号、2001年3月、p.1-20）、「謝冰心の作家魂——一片の冰心」（『日本中国学会報』第56集、2004年10月、p.241-260）、「謝冰心の一面——したたかさ」（『関西大学中国文学会紀要』第27号、2006年3月、p.B1-B14）、「謝冰心と家塾」（『関西大学東西学術研究所紀要』第42巻第1号、2009年4月、p.A1-A22）。

¹⁵ 例えば以下のような論文がある。萩野脩二「謝冰心とスチュアート——燕京大学を中心に」（『関西大学文学論集』第54巻第4号、2005年3月、p.29-49）。牧野格子「グレース・ポイントンについて——謝冰心、楊剛との交流を中心に」（『関西大学中国文学会紀要』第27号、2006年3月、p.B111-B130）。

¹⁶ 筆者は『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲）の第2章で、冰心と倉石武四郎の交流について少し触れた。また、牧野格子「瀬尾すみ江について——謝冰心の視点から」（『千里山文学論集』第67号、2002年3月、p.69-87）、岩崎菜子「戦後における謝冰心と三島すみ江の交流」（『資料紹介』『野草』第72号、2003年8月、p.97-129）などの研究論文、資料紹介がある。なお、「瀬尾すみ江」と「三島すみ江」は同一人物である。瀬尾すみ江は三島一と結婚して、名字が変わり、「三島すみ江」になった。

¹⁷ 日本中国文化交流協会網<http://www.nicchubunka1956.jp/> 2012年3月1日最終確認。なお、日本中国文化交流協会現在の事務所は、東京都千代田区有楽町1-10-1有楽町ビルディング423号室に設置されている。

¹⁸ 日本中国文化交流協会網<http://www.nicchubunka1956.jp/> 2012年3月1日最終確認。

¹⁹ 井上靖「創立二十五周年を迎えて」、初出は『日本文化交流』第295号、1981年3月。底本は井上靖『井上靖全集』第26巻、新潮社、1997年、p.555-556。

²⁰ 井上靖「文芸復興期の中国」、初出は『現代』第12巻第8号、1978年8月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.533。

²¹ 中国網日本語版（チャイナネット）<http://japanese.china.org.cn/japanese/185570.htm> 2012年3月21日最終確認。

²² 井上靖「東京の敦煌」、初出は『毎日新聞』1958年1月10日。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.475-476。井上靖「広州のこと」、初出は『季節 詩の手帖』5月号（第10号）、「随想」欄、1958年5月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.477-478。

²³ 日中戦争初期、井上靖は輜重兵特務兵として応召し、中国河北省に送られた。1937年8月25日から1938年3月7日までこの体験である従軍日記をつけていた。この日記は『井上靖全集』には収録されていないもので、2009年12月、雑誌『新潮』（第106巻第12号）に「新発見井上靖 中国行軍日記〈含解説〉」という題で公開された。

²⁴ なお、他にはこのような発起人がいた。「文学」青野季吉、阿部知二、石川達三、宇野浩二、亀井勝一郎、久保田万太郎、多田裕計、中島健蔵、中野重治、堀田善衛、山本健吉、「学術」貝塚茂樹、倉石武四郎、桑原武夫、近藤康男、坂田昌一、末川博、土岐善麿、南原繁、原田淑人、増田渉、吉川幸次郎、「婦人」羽仁説子、松岡洋子、丸岡秀子、「演劇」宇野重吉、尾崎宏次、木下順二、杉村春子、千田是也、戸板康二、「舞踊」石井漠、小牧正英、高田せい子、花柳徳兵衛、松山樹子、「映画」牛原虚彦、内田吐夢、小津安二郎、乙羽信子、衣笠貞之助、島崎清彦、新藤兼人、田口助太郎、田坂具隆、野田高梧、望月優子、八木保太郎、吉村公三郎、「美術」北川桃雄、谷川徹三、中川一政、福田豊四郎、「写真」木村伊兵衛、田村茂、土門拳、名取洋之助、渡辺義雄、「書道」西川寧、豊道春海、「音楽」山田耕筰、「宗教」阿部義宗、賀川豊彦、「出版・報道」下中弥三郎、白石凡、高木健夫、吉野源三郎。日本中国文化交流協会網<http://www.nicchubunka1956.jp/ayumi59.html> 2012年3月21日最終確認。

²⁵ 「中国人民対外文化協会」は1953年5月3日に発足した。その主旨は中国人民と世界各国の人びとの間の理解と友情を深め、相互間の経済、社会、文化、科学技術、教育などの面の交流と協力を促し、世界平和を擁護することである。中国人

民対外友好協会には弁公室、アジア・アフリカ部、日本部、ヨーロッパ・アジア部、アジア・オセアニア部、文化交流部、機関党委員会などの機構が設置されている。1966年以降、「中国人民対外文化友好協会」に改称され、1969年、「中国人民対外友好協会」に改名された。(中華人民共和国国家機構〈その他の重要な社会団体〉2003年7月15日。中国網日本語版〈チャイナネット〉<http://japanese.china.org.cn/japanese/77782.htm>、百度百科網<http://baike.baidu.com/view/63535.htm> 2012年3月21日最終確認。)

²⁶ 「中国作家協会」は1949年7月23日に発足した。中国作家協会は中国共産党の指導の下で、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指導とし、文芸が人民に奉仕し、社会主義に奉仕する方向を堅持し、「百花齊放、百家争鳴」の方針を貫徹実行し、文学・芸術の法則を十分に尊重し、文学・芸術の民主を発揚し、創作の自由を保証し、全国の各民族の作家を団結させ、中国の特色をもつ社会主義の文学を発展させ、繁栄させ、社会主義の精神文明の建設、社会主義の現代化を実現するよう努力奮闘している。中国作家協会には弁公庁、創作連絡部、対外連絡部、人事部、機関党委員会などの機構が設置されている。(中華人民共和国国家機構〈その他の重要な社会団体〉2003年7月15日。中国網日本語版〈チャイナネット〉<http://japanese.china.org.cn/japanese/77782.htm> 2012年3月21日最終確認。)

²⁷ 井上靖「井上靖・中国カメラ紀行」、初出は『サンデー毎日』1961年8月6日号、巻頭グラビア頁(著者の写真付き)。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.483-484。井上靖のその時の訪中に対しては、「日本作家代表団の一員として訪中した」という表現を使ったが、『新潮日本文学アルバム71 有吉佐和子』(宮内淳子編集・評伝、橋本治エッセイ、新潮社、1991年)のp.47左上にある写真の説明によると、井上靖を含む訪中団体を「日本文学代表団」と表示している。この二つの団体は同じ団体である、と思われる。なお、写真には亀井勝一郎、白土吾夫、井上靖、平野謙、有吉佐和子、周恩来、韓北屏、廖承志、劉白羽、陽翰笙、楊朔、王曉雲、一名通訳と思われる人が映っている。

²⁸ 井上靖「世界の大きな星は落ちた」、初出は『日本文化交流』第226号、1976年1月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.519。

²⁹ 「文芸復興期の中国」前掲、p.534。

³⁰ 井上靖「中国の旅——鑑真逝世千二百年記念行事」、初出は『サンデー毎日』1963年11月17日増大号(著者の写真4葉付き)。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.486-488。

³¹ 「文芸復興期の中国」前掲、p.534。

- ³² 「世界の大きな星は落ちた」前掲、p.519。
- ³³ 同上。
- ³⁴ 井上靖「私と南京」、初出は『中日新聞』1981年3月17日。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.556。井上靖「中華人民共和国建国三十五周年を祝って」、初出は『日本文化交流』第373号、1984年10月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.572。
- ³⁵ 「世界の大きな星は落ちた」前掲、p.519。
- ³⁶ 井上靖「中国の旅——国慶節に招かれて」、初出は『毎日クラブ』1974年12月1日号（著者撮影のカラー写真14葉のキャプションも井上靖が書いた）。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.494-497。
- ³⁷ 井上靖「揚州の旅」、初出は『日中文化交流』第211号、1974年11月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.492-494。井上靖「再び揚州を訪ねて」、初出は『舞曲扇林』第22、23合併号、1975年2月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.497-498。
- ³⁸ 文化大革命のとき、北京の歴史学者呉晗、鄧拓、張蘇は真っ先に批判され、文学界に於いては周揚、茅盾、夏衍、劉白羽といった人たちが、社会の表面から姿を消されてしまった。張光年、杜宣、周而復は社会の表面からその名が消されてしまった。「文芸復興期の中国」前掲、p.534。
- ³⁹ 「文芸復興期の中国」前掲、p.534。
- ⁴⁰ 井上靖「ふしぎな美しいはにかみ」、初出は『毎日グラフ』1975年6月29日号（著者撮影のカラー写真27葉付き）。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.499-500。
- ⁴¹ 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所網「アジア動向データベース」<http://d-arch.ide.go.jp/browse/html/1975/104/1975104DIA.html> 2012年2月26日最終確認。
- ⁴² 「文芸復興期の中国」前掲、p.534-535。
- ⁴³ 井上靖「明るくなった国」、初出は『毎日新聞』1977年1月1日。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.524。
- ⁴⁴ 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所網「アジア動向データベース」<http://d-arch.ide.go.jp/browse/html/1976/104/1976104DIA.html> 2012年2月26日最終確認。
- ⁴⁵ 「文芸復興期の中国」前掲、p.535。
- ⁴⁶ 「中華人民共和国建国三十五周年を祝って」前掲、p.573。

- 47 井上靖「敦煌の旅」、初出は『日中文化交流』第259号、1978年7月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.530-532。井上靖「黄河の流れ」、初出は『旅』9月号（第53巻第9号）「特集 中国旅行」、1979年9月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.542。
- 48 「文芸復興期の中国」前掲、p.533。
- 49 「文芸復興期の中国」前掲、p.536。
- 50 「文芸復興期の中国」前掲、p.537。
- 51 井上靖「新たな発展の年」、初出は『日中文化交流』第280号、1980年1月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.547。
- 52 井上靖「桂林讚」、初出は『中国の旅5 桂林と華中・華南』講談社・中国人民美術出版社、1980年7月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.551。
- 53 長井暁「テレビは中国をどう伝えてきたか——NHKの特集番組を中心に」NHK ONLINE 網 http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_01/090104.pdf 2012年3月23日最終確認。
- 54 井上靖「胡楊の夜」、初出は『PEN』第186号、1980年7月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.550。
- 55 井上靖「朱穆之文化相の来日を歓迎して」、初出は『日中文化交流』第365号、1984年6月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.571。
- 56 井上靖「新たな信頼と信義の関係」、総題「日中平和友好条約締結を祝す」、初出は『日中文化交流』第261号、1978年9月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.539。
- 57 「新たな発展の年」前掲、p.547。井上靖「周揚先生を団長とする中国作家代表団の来日を喜ぶ」、初出は『日中文化交流』第265号、1979年1月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.540。
- 58 井上靖「楽しい充実した二十日間」、初出は『日中文化交流』第272号、1979年7月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.541。
- 59 井上靖「新しい年の始めに」、初出は『日中文化交流』第414号、1987年1月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.587。
- 60 「創立二十五周年を迎えて」前掲、p.555。
- 61 「創立二十五周年を迎えて」前掲、p.555-556。
- 62 同上。
- 63 井上靖「私と南京」、初出は『中日新聞』1981年3月17日。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.558。

- ⁶⁴ 「私と南京」前掲、p.557。
- ⁶⁵ 井上靖「北京の正月」、初出は『日中文化交流』第334号、1983年2月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.563-564。
- ⁶⁶ 井上靖「葵丘と都江堰」、初出は『日中文化交流』第359号、1984年2月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.569。
- ⁶⁷ 井上靖「周揚さんを悼む」、初出は『日中文化交流』第460号、1989年9月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.586。
- ⁶⁸ 井上靖「中国の友人の皆さんの来日を歓迎して」、初出は『日中文化交流』第364号、1984年5月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.570。
- ⁶⁹ 井上靖「朱穆之文化相の来日を歓迎して」、初出は『日中文化交流』第365号、1984年6月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.571。
- ⁷⁰ 「中華人民共和国建国三十五周年を祝って」前掲、p.572。
- ⁷¹ 「テレビは中国をどう伝えてきたか——NHKの特集番組を中心に」前掲。
- ⁷² 井上靖「創立三十周年を迎えて」、初出は『日中文化交流』第398号、1986年3月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.577。
- ⁷³ 井上靖「二十五回目の訪中」、初出は『日中文化交流』第403号、1986年6月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.579。
- ⁷⁴ 井上靖「王蒙文化相の来日を歓迎して」、初出は『日中文化交流』第417号、1987年4月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.581-582。
- ⁷⁵ 井上靖「中国人民対外友好協会代表团、中国国家文物局代表团を歓迎して」、初出は『日中文化交流』第467号、1990年4月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.581-582。
- ⁷⁶ 顧農「巴金の両件軼事」（「巴金に関する二つのエピソード」）『中華読書報』2010年11月3日。中国新聞網<http://www.chinanews.com/cul/2010/11-03/2632010.shtml> 2012年3月22日最終確認。
- ⁷⁷ 冰心が日本友好事業に貢献したことは、彼女が来日したときの発言「原爆被災の国にきて」（座談会記録、訳者不詳『婦人公論』第40巻第10号<総462号>、1955年10月）と「日本の青年のみなさまへ——子子孫孫の歴史とこれからの道」（謝冰心発言、訳者不詳『アジア経済旬報』第907号、1973年8月1日、p.1-6）でも窺うことができる。詳しくは冰心の発言、虞萍訳「日中友好事業に尽力する女性作家謝冰心——新発見の二篇の発言記録から」（『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第42号、2012年2月、p.277-302）を参照されたい。
- ⁷⁸ 井上靖「旧知貴ぶべし」、初出は『日中文化交流』第62号、1974年1月。底本

は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.489。

⁷⁹ 冰心『『井上靖西域小説選』序』、初出は『文芸報』1982年第11期、1982年11月。底本は卓如編『冰心全集』第7巻、海峡文芸出版社、1994年、p.316。

⁸⁰ 筆者が2011年3月31日、4月1日に、中国現代文学館所蔵の冰心寄贈書を調べた結果に基づく。

⁸¹ 『当代中国文化名人伝記画冊 冰心』前掲、p.101（写真246）がこの時の写真である。

⁸² 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所網「アジア動向データベース」<http://d-archide.go.jp/browse/html/1976/104/1976104DIA.html> 2012年2月26日最終確認。

⁸³ 『当代中国文化名人伝記画冊 冰心』前掲、p.140（写真339）に、1984年冰心が自宅で井上靖を招待した写真がある。この写真の具体的な撮影日時が書かれていないが、井上が北京に訪れた11月であると思われる。

⁸⁴ 『『井上靖西域小説選』序』前掲、p.316。

⁸⁵ 『『井上靖西域小説選』序』前掲、p.317。

⁸⁶ 本協会は、日中民間往來の發展と需要に基づき、元総理周恩来の提唱のもとに、中華全国总工会、中華全国青年联合会、中華全国婦女連合会、中国人民保衛世界和平委員会、中国アジア・アフリカ団結委員会、中国人民対外友好協会、中国文学芸術界連合会、中国作家協会、中華全国新聞工作者協会、中国国際貿易促進委員会、中華全国体育総会、中国紅十字会総会、中国人民外交学会、中国政治法律学会、中国科学技術協会、中国全国学生連合会、中国仏教協会など計19個全国規模の団体が発起し、構成された。中国日本友好協会網<http://www.zryx.org.cn> 2012年3月21日最終確認。

⁸⁷ 協会発足時のほかの主要な役員は以下の通りである。「名誉会長郭沫若、会長廖承志、副会長南漢宸、趙樸初、周而復、秘書長趙安博、副秘書長林林、孫平化、王曉雲、常務理事丁拓、王耕、劉希文、莊濤、李雲川、李夢華、肖方洲、肖向前、吳曙東、趙石生、趙政一、鄭森禹、倪斐君、郭芳為、張香山、張韻之、黃甘英、謝南光、韓北屏。」日本中国文化交流協会網<http://www.nicchubunka1956.jp/ayumi63.html> 2012年3月18日最終確認。

⁸⁸ 冰心の来日状況については、『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲）の第2章に詳しい。

⁸⁹ 日本中国文化交流協会網<http://www.nicchubunka1956.jp/ayumi63.html> 2012年3月21日最終確認。

⁹⁰ 「『井上靖西域小説選』序」前掲、p.316。冰心がここで触れた井上靖からの寄贈書は中国現代文学館にはなかった。なお、『獵銃』の英語版は Yasushi Inoue ; translated by Sadamichi Yokoö and Sanford Goldstein “*The hunting gun*” Rutland, Vt. ; Tokyo : Tuttle : Prentice-Hall , 1961 である。

⁹¹ 「旧知貴ぶべし」前掲、p.489-490。

⁹² 「旧知貴ぶべし」前掲、p.489。

⁹³ 同上。

⁹⁴ 原文は“我們在日本朋友家里，往往能喝到‘茅台’酒，能吸到‘中華’烟，看賞中国的字画文物，這些共同欣賞的事物，都把我們的心拉得更近。”となっている。（「訪日觀感」前掲、p.321。）

⁹⁵ 井上靖『西域小説集』講談社、1965年。

⁹⁶ 原文は“中央民族学院の幾位教師翻譯了井上靖先生的『西域小説選』，請我作序。我感到榮幸而又慚愧。我既不懂日文，又沒有去過祖國的西北，對於原著中的景物和翻譯的甘苦，我都无从充分領略；但是井上靖先生是我很知心的日本朋友，又正因為我没有去過西域，我要从井上靖先生這本歷史小說中来認識了解我自己国家西北地区当年的、美梦般的風景和人物。這是我欣然執筆作序，并衷心歡迎這個訳本出版的原因。”となっている。（「『井上靖西域小説選』序」前掲、p.316。）

⁹⁷ 原文は“我十分清楚地記得每次井上先生从西北回到北京和我們相見時，就熱情洋溢地和我們談着他旅游見聞的一切，親切熟悉，如數家珍。靜聆之下，使我敬慕而又感動。我感謝井上先生，他使我更加体会我們的国土之遼闊，我国歷史之悠久，我国文化之優美。他是中国人民最好的朋友。他在中日文化之間，架起了一座美麗的虹橋，我向他致敬！”となっている。（「『井上靖西域小説選』序」前掲、p.317。）

⁹⁸ 井上靖「充実した二十年」、初出は『日中文化交流』第229号、1976年3月。底本は『井上靖全集』第26卷、前掲、p.521。

⁹⁹ 孫麗萍「巴金与井上靖：『把心掏出来』的三十年友情」新華網上海2011年11月15日 http://news.xinhuanet.com/world/2011-11/15/c_111169053.htm 2012年3月24日最終確認。

¹⁰⁰ 「周揚先生を団長とする中国作家代表団の来日を喜ぶ」前掲、p.540。

¹⁰¹ 井上靖「年頭にあたって」、初出は『日中文化交流』第377号、1985年1月。底本は『井上靖全集』第26卷、前掲、p.574。

¹⁰² 井上靖「会長就任に当って」、初出は『日中文化交流』第289号、1980年8月。底本は『井上靖全集』第26卷、前掲、p.553。

¹⁰³ 2012年1月30日、内閣府サイトで公開された内閣府世論調査報告書（2011年10月調査）「外交に関する世論調査」1.日本と諸外国との関係（3）日本と中国ア中国に対する親近感による。内閣府網<http://www8.cao.go.jp/survey/h23/h23-gaiko/zh/z10.html> 2012年3月24日最終確認。

¹⁰⁴ 「会長就任に当って」前掲、p.553。

¹⁰⁵ 井上靖「年頭の言葉」、初出は『日中文化交流』第293号、1981年1月。底本は『井上靖全集』第26巻、前掲、p.554。

¹⁰⁶ 謝冰心、村岡花子対談「中国と日本の女性」『教育と社会』第2巻第10号、1947年10月。

¹⁰⁷ 同上。

¹⁰⁸ 『中日文化協会々報』記者「謝冰心女史講演会」[協会記事]『中日文化協会々報』第2号、1947年11月。

¹⁰⁹ 冰心「寄小読者」（通訳十八）（『冰心全集』第2巻、前掲、p.203-204）。

¹¹⁰ これに関しては、拙著『冰心研究——女性・死・結婚』（前掲）の第2章に触れたことがある。

¹¹¹ 三笠宮殿下とは三笠宮崇仁のことで、大正天皇第4皇男子、昭和天皇の末の弟である。三笠宮崇仁（1915- ）。学習院中等科を経て、陸軍士官学校を卒業。騎兵連隊で勤務した。1941年、陸軍大学校を卒業し、後参謀として勤務した。戦後、東京大学文学部研究生として「古代オリエント史」を専攻した。1955年以降、東京女子大学や青山学院大学などの講師として「古代オリエント史」を講義し、1985年度から2002年度まで、東京芸術大学美術学部の客員教授として特別講義をした。その間、公式訪問、学術的国際会議への参加および史跡調査のため、約30回外国に旅行した。1991年11月には、フランスの「碑文・文芸アカデミー」の外国人会員に、1994年6月には、ロンドン大学の「東洋・アフリカ研究学院」の名誉会員に就任した。現在では、(財)中近東文化センター名誉総裁、(公財)日本ワックスマン財団名誉総裁、日本・トルコ協会名誉総裁、日本赤十字社名誉副総裁を務めている。(宮内庁網<http://www.kunaicho.go.jp/about/history/history05.html> 2012年3月21日最終確認。)

¹¹² 謝冰心、三笠宮殿下対談「希望を語る」『鏡』第1巻第1号、1948年8月。

¹¹³ 財団法人井上靖記念文化財団網 (<http://www.inouezaidan.or.jp/>) によると、財団法人井上靖記念文化財団の住所は東京都目黒区駒場4-3-55（日本近代文学館内）となっており、井上靖の息子井上修一が理事長を務める。2012年3月1日最終確認。

¹¹⁴ 「特別図書寄贈事業 井上靖全集特別図書寄贈事業」『国際交流基金NEWS』第270号、2003年5月1日、p.5。 <http://www.jpf.go.jp/j/publish/periodic/knews/pdf/knews0305.pdf> 2012年3月21日最終確認。

¹¹⁵ 「中華人民共和国建国三十五周年を祝って」前掲、p.573。

¹¹⁶ 内閣府網 <http://www8.cao.go.jp/survey/h23/h23-gaiko/2-1.html> 2012年3月24日最終確認。

¹¹⁷ 内閣府網 <http://www8.cao.go.jp/survey/h23/h23-gaiko/zh/z10.html> 2012年3月24日最終確認。

¹¹⁸ 新華社東京3月21日 = 呉谷豊「南京大虐殺否定発言 日中友好協会、名古屋市長に撤回要請」(劉英翻譯、阿部陽子編集翻譯)『毎日中国経済』2012年03月22日。毎日中国経済網 http://www.xinhua.jp/socioeconomy/politics_economics_society/292571/ 2012年3月24日最終確認。